



慶應義塾大学
教養研究センター設置科目

「生命の教養学」

2024 年度 講義記録

死と再生

目次

まえがき		1
相分離生物学：		
タンパク質溶液から生命をイメージする	白木賢太郎	3
生命のはじまりのポリテイクス		
——インドにおける中絶の語りから	松尾 瑞穂	5
道教の永生・再生・転生	松本 浩一	8
体運動習性とはなにか？	新妻 雅弘	10
美術は「死と再生」をどう表現してきたか	香川 檀	11
『神曲』の生と死	村松真理子	14
生きるための死と再生	田口 瑞姫	16
死と再生のコスモロジー		
——出羽三山の修験道	鈴木 正崇	18
「蘇生」論争と自然発生説	鈴木 忠	21
生まれることを問う	樋口 大夢	23
語り直されるノアの方舟の物語		
——20世紀ドイツ語圏の文学を読む	宇和川 雄	25

2024 年度教養研究センター設置科目
「生命の教養学」講義日程・テーマ一覧

〔開講〕 春学期・金曜日・4 時限目 〔場所〕 来往舎 1F シンポジウムスペース

	講義日	講師 (敬称略)	所属・職位	テーマ
1	4月12日	石川 学	慶應義塾大学商学部准教授 (コーディネーター)	導入、履修者選抜
2	4月19日	白木賢太郎	筑波大学数理物質系教授	相分離生物学： タンパク質溶液から生命をイメージ する
3	4月26日	松尾瑞穂	国立民族学博物館准教授	生命のはじまりのポリテクス —インドにおける中絶の語りから
4	5月10日	松本浩一	筑波大学名誉教授	道教の永生・再生・転生
5	5月17日	新妻雅弘	慶應義塾大学システムデザ イン・マネジメント研究科 准教授	体運動習性とはなにか？
6	5月24日	香川 檀	武蔵大学名誉教授	美術は「死と再生」をどう表現してき たか
7	5月31日	村松真理子	東京大学大学院 総合文化研究科教授	『神曲』の生と死
8	6月7日	田口瑞姫	慶應義塾大学文学部助教 (有期) (自然科学)	生きるための死と再生
9	6月14日	鈴木正崇	慶應義塾大学名誉教授	死と再生のコスモロジー —出羽三山の修験道
10	6月21日	鈴木 忠	慶應義塾大学医学部准教授	「蘇生」論争と自然発生説
11	6月28日	樋口大夢	東洋学園大学グローバル・ コミュニケーション学部 専任講師	生まれることを問う
12	7月5日	宇和川雄	関西学院大学文学部教授	語り直されるノアの方舟の物語 —20世紀ドイツ語圏の文学を読む
13	7月12日	グループディスカッション、ふりかえり		
14	7月19日	総括・筆記試験		

(所属・職位は開講時のもの)

まえがき

本冊子は、慶應義塾大学教養研究センター設置科目「生命の教養学」（2024年度）の講義記録です。この科目は、自然科学および人文・社会科学の各分野において、それぞれ異なる角度から問われ続けている「生命」という大きな主題を結節点に、いわゆる「文系」「理系」の垣根を越えて広がる学際的な知の現場を提供すべく企画されたオムニバス形式の授業です。年度ごとに定められたテーマに即して、塾内外から招いた11名の専門家による連続講義が行われます。

2024年度のテーマは「死と再生」でした。近現代は、戦争や虐殺、災害などによる大量死によって特徴づけられる時代でもあり、「〇〇名死亡」というかたちで数値によって均一化されてしまう「無名の死」は、最も非人間的な出来事だと言えます。いっぽうで、大量死の時代の人間は、固有の名を持つ死の重みから逃げ出すかのように、進んで死を生領域から排除してもきました。日常空間から切り離された医療機関でひっそりと迎えられる死や、特定の期間にのみ、形式化された儀礼を通じて想起される死が当たり前になったことは、その証左です。そうしたなかで、敢えて言えば、ある種の「死の魅惑」が機能しているようにも思われます。たとえば東日本大震災のあと、死者の来訪を受けたとする経験が、現地ですばしば語られました。あくまで言説としての意味に注目するなら、死者を（そして失われた生を）鮮やかに想起することが、愛する者とともに自らの一部をも失ってしまった生者にとって、再び生き始めるための力になったのだと考えられないでしょうか。そして、大量死の場合に限らず、ひとりひとりの死を引き受けることは、遺された者にとって、再生の導きの糸となるのではないのでしょうか。私たちの時代は、永遠の生の夢とも結ばれた（まさしく）再生医療への注力や、死なき生命（？）たりうるかもしれないAI開発の試みによって、一見すると、さらに死を生から排除する方向へ向かっています。それは、死に条件付けられたものとしての「再生」の可能性をも封じることにつながるのでしょうか。

今回、このような問題意識のもとで、蛋白質溶液学、医療人類学、中国宗教学、AI研究、表象文化論、イタリア文学、発生生物学、宗教人類学、比較動物学、教育哲学、ドイツ文学・思想という、多彩な分野の専門家に登壇いただきました。60分間の講義後の質疑は、講師も運営側も驚くほど熱のこもったものとなり、授業終了後も個別に質問者の列ができるほどでした。本講義記録はその充実を顧みて、かたちに残すことをねらいとしています。

末筆ながら、多忙をきわめる学期中に、貴重な時間を割いて本講義のためにご尽力ください、講義記録の作成にもお力添えをくださった講師の先生方に、深く感謝申し上げます。受講者たちがこのたびの学びを、各人それぞれの仕方で活かしていくてくれることを確信しています。

2024年8月

石川 学

「生命の教養学」2024年度企画委員

有川 智己（経済学部 教授／生物学・系統分類学）
石川 学（委員長：商学部 准教授／フランス文学・思想）
川上 了史（理工学部 専任講師／生物分子科学・生体機能化学）
谷口 尚子（法学部 教授／計量政治学）
西尾 宇広（文学部 准教授／ドイツ文学）
三原龍太郎（経済学部 准教授／文化人類学・創造産業論）
宮本 万里（商学部 准教授／政治人類学・南アジア地域研究）
(五十音順、職位は当時)

ティーチング・アシスタント

西尾 英杜（商学部2年）

相分離生物学： タンパク質溶液から生命をイメージする

筑波大学数理物質系
白木 賢太郎／蛋白質溶液学

生命の理解は20世紀になり一挙に深まった。20世紀半ばの生化学や、その後に発展した分子生物学や構造生物学によって生命を分子や原子のレベルで理解できるようになった。21世紀がはじまる頃にはゲノミクスが成熟し、微生物からヒトまでのあらゆる生きもののゲノムが明らかにされた。ここ数年でAIの開発が急速に進み、研究者がこれまで発見してきた2億個ものタンパク質の構造をAIが解読し、データベースに入っている。現在では、生命を構成する分子や原子は、ほぼ理解されていると言ってよい。このような研究の成果のおかげで、われわれの健康や生活は、この半世紀で格段に改善された。

一方、生きた状態とは何かを理解するためには、分子の理解だけでは足りないことも何となくわかるだろう。例えば、生きた細胞をミキサーにかけると細胞は死ぬが、分子は壊れない。このミキサーにかけられた細胞液は、生命を構成しているすべての分子が含まれているはずだが、生きてはいない。要するに分子と分子とのつながりの理解が、生きた状態の理解に必要なのである。それでは、分子と分子の間には何があるのだろうか？ここに迫るのが相分離生物学である。原理をひとことでいうと「溶ける」「溶けない」という現象である。溶けない場合には凝集した状態になる。この仕組みを決めるのがタンパク質の溶解度であり、溶けなくなった場合には液-液相分離が起こって液滴と呼ばれる集合物を作る。

相分離生物学の見方によって説明されようとしている現象は多岐におよぶ。よく学んでいる大学生は、教科書をしっかり読むほど不思議だと思えることが出てくるだろう。なぜ細胞内にある何百何千もの酵素反応が混線することなく整然と機能できるのだろうか？細胞内にはなぜATPが必要以上に高濃度存在しているのだろうか？メチル化やリン酸化のようなごくわずかな化学修飾がなぜ遺伝子群に発現のような巨視的な現象を引き起こせるのだろうか？このような疑問を、私は大学生のころに持っていた。そもそも細胞内になぜこれだけ高濃度のタンパク質が存在しているのだろうか？アルツハイマー病を根治する抗体薬がなぜ20年以上にわたり開発できなかったのか？生命が誕生した40億年前に、どのような仕組みで物質が集まったのだろうか？このような本質的な疑問に、ようやく答えることができるようになった。

相分離生物学は要するに、これまでの「分子」を対象にした生命科学ではなく、「分子集合物」を対象にした生命科学である。液-液相分離によって必要な酵素が濃縮された液滴の状態に集まるとすれば、多くの酵素が整然と働く理由も説明できる。メチル化やリン酸化の翻訳後修飾は、タンパク質の溶解度を変えて凝集しやすさを制御していることも、タンパク質は相分離によって機能制御を受けるので細胞内に高濃度のタンパク質があることも、高濃度のタンパク質を馴染ませるため ATP のようなハイドロトロープが必要であることも、イメージできるだろう。

細胞内にあるタンパク質が液-液相分離しているという発見は、2009 年のサイエンス誌に記載された論文にさかのぼる。この論文は発表された当初はほとんど注目されなかったが、2015 年ごろから同じ見方の研究がトップジャーナルをにぎわすようになり、2018 年ごろにようやく世界中の学会で取り上げられるようになった。現在では、著名な分厚い教科書にも、相分離に関する記述が増えるようになってきた。

今回の講義では、新たな学問分野の誕生について、あまり安易に簡略化をせず、鍵となる重要な発見や、まだ未解決の謎などについては専門用語を遠慮なく使って紹介した。どうすれば生きた状態を理解でき、再生のために活用できるのかを考えるのが、この分野の概要である。一方、こういう新しい見方による基礎研究は、単なる基礎研究にとどまるものではなく、むしろ産業に直接役立つことも紹介した。食品や医薬品、美容品など、具体的な製品や特許や論文など、多くのアウトプットにつながっている。

質疑応答は、規定時間の 30 分を超え、有志の学生とさらに 30 分ほど延長したくらいであった。講義後に提出してもらったレポートを読んでいると、難しいところが多かったが、理解できるように自分でも学んでみたいという人がたくさんいた。もっと学んでみたいと思ってもらうことが、このようなオムニバス形式の講義での最大の狙いだと思うと、成功なのだと思う。

最後に、講義の内容を代表するようなレポートを 4 つ取り上げておきたい。

「生化学や細胞生物学について深く学んでいないが、今回の話でそのおもしろさが伝わり早く学んで自分もこのような研究活動に関わりたいと思えるようになった。」

「『水に溶けにくいものをとかそう』というシンプルな目標から、アルギニンをタンパク質溶液に加えたらいという結論が導かれ、最先端の研究に応用されているということは、いかに身近な現象に関心を向けることが重要であるかを知った。」

「全体を通して生活に寄り添うような研究が多く、研究者の社会に貢献しようとする姿勢が見えて感銘を受けた。」

「現在、理工系の研究は細分化が進み、個別の分子等に対象がしぼられているように考えられていたが、今回の講義を経て、もっとマクロな視点で分子間の相互作用に焦点を当てることで一気に研究の進んだというのは他の学問においても同様なのだろうと感じた。」

— 2024年4月26日

生命のはじまりのポリティクス ——インドにおける中絶の語りから

国立民族学博物館

松尾 瑞穂／文化人類学・ジェンダー研究

人工妊娠中絶（以下、中絶）は、日本の母体保護法第2条で「胎児が、母体外において、生命を保続することのできない時期に、人工的に、胎児及びその付属物を母体外に排出すること」と定義されている。近世以降、中絶は国家や教会などの統治機構によって規制されており、その違反は墮胎罪などで厳しく罰則化されてきた。キリスト教では、中絶の殺人化はローマ教皇シクストゥス5世（在位1585–90年）以降定められ、カトリック教国では中絶が禁止されてきたし、仏教も不殺生の立場から中絶を罪だと見なしてきた。60年代のフェミニズム運動の流れで、多くの社会では中絶が可能となったとはいえ、今日でも中絶は、アメリカ合衆国を始めとする多くの国で、政治的な論争の的となり続けている。このように、中絶は、まさに女性と胎児のみならず、国際社会、国家、宗教、道徳／倫理、経済、家族・親族、夫婦関係…などさまざまなアクターが絡み合う現象である。

一方で、西洋を中心とする中絶をめぐる法と倫理では、女性の自己決定権や人権と胎児の生存権のいずれが優先されるべきなのか、母体 vs 胎児の二項対立で捉えられることが多かった。それに対して、本講義では日常的倫理（everyday/ordinary ethics）やケアの倫理（ethics of care）の視座に立ち、中絶を多角的に理解する必要性を提示した。

事例として取り上げるのは、インドにおける中絶の倫理である。インドでは、1971年に成立したMTP法により、現在では妊娠24週までの中絶や、配偶者やパートナーの同意なしの中絶が合法化されている。経口中絶薬も容易に入手できることもあり、非合法中絶も合わせると、生殖年齢にある女性1000人に対して47.0と推計されている（2018年）。とはいえ、比較的許容度の高い中絶が初期から合法化されていたとはいえ、法制化にいたる議論では、女性の権利や自己決定という論点ではなく、産児制限の一環として、不妊手術と並置される形で議論が進められていたことには注意を払う必要がある。すなわち、女性運動のなかで議論され獲得された権利としての中絶ではなく、インドにおいては国家課題である人口問題を解決するための一手段としての役割が期待されていた。

それは、私の文化人類学の調査で得られた西インド・マハーラーシュトラ州の女性たちの実践のなかでも、明らかとなった。女性にとって最も身近な中絶は、産児調節とし

て機能しており、多くは予期せぬ妊娠への対処として中絶を選択していた。その理由としては、子どもを出産後すぐに妊娠したというバース・スペーシングの失敗や、生存する子どもの数の調整といったものが挙げられる。少数だが、妊娠中の胎児の障害可能性を理由とした中絶も存在した。インド社会においては、障がい児を生き育てることに対する社会的忌避感が強く、スティグマ化されている。社会福祉制度が整備されていない中、障がい児の養育は家族に大きく依存するのが現状であり、女性たちは社会的ネットワークから疎外される、周縁化される、という関係性の論理から障がい児を育てることの困難さを説明している。すなわち、どのような子どもをいつ産むのか、ということは個人的な選択のみならず、家族・親族ネットワークに埋め込まれた社会的実践なのである。

また、女性と産婦人科医への聞き取り調査からは、妊産期の検査や治療について、医師の裁量が大きく、妊婦の選択に医師が果たす役割が大きいということが分かる。2022年にアジア9か国で実施したオンライン調査「アジアにおける出生前検査と障害観に関する実証的研究」(JSPS20H01564)においても、「もし胎児に障害があった場合は誰に相談するか」という質問に対して、インド女性の間では医師(64%)が夫・パートナー(62%)、両親(29%)よりも最も高く選ばれていた。女性にとっては、医師がどのような助言をし判断を下すのか、ということが、中絶の選択においても大きな意味を持つ。

さらに、インドの主な宗教であるヒンドゥー教においても、墮胎は大きな罪だと見なされているものの、神話や縁起譚での胎児の形成は、必ずしも受胎の瞬間に始まるものではない。数か月かけて胎児が段階的に成長し、どこかの段階で生命が胎児に入ること、人間となるとみなされている。例えばマラーティー語の *Datta Mahātmya* では、「血液と混ざった脂肪の塊は5日後に泡ができ、7日後には袋になる。1ヶ月後には大きくなり、硬くなる。2ヶ月後、頭部が形成される。3ヶ月目には腹、手と足が出てくる。4ヶ月目に皮膚、5ヶ月目に爪ができる。6ヶ月目には新しい穴が空く。そして足から、命として一番内側に残る風(vayu)が入る。7ヶ月目に頭頂が割れて意識が入る…」と続く。同様に、女性たちも3~5ヶ月と人によって幅があるものの、妊娠中期に胎児に生命(jiv)が入ることで、胎動が起こると考えている人もおり、その場合には生命が入った後には子どもは中絶してはいけない、という倫理観が見られた。すなわち、胎動が胎児の生命の証左として捉えられており、それを越えた中絶は彼女たちの認識においてもタブー視されているのである。

以上のことから、インドでは中絶が広く行われているものの、それは決して母親と胎児の権利の対立という二項対立によって成り立つのではなく、集合的な選択の中で実践されていることが見えてくる。そしてそのネットワークには、夫だけでなく、家族・親族や医師を含むより広い社会関係が内包されており、中絶を選択する女性たちは倫理的責任を負う「孤独な主体」ではない。そして、生命のはじまりは、科学、医学のみならず、法や倫理／道徳、そして人びとの生命観や社会関係の複数の連なりによって作り出され、操作され、実行されているといえる。

講義後の質疑応答では、多数の質問が挙げられたため授業時間内では終了せず、授業後に学生が列をなして質問を聞きに来てくれたことが印象的である。学生の熱意に私自身も大変刺激を受けた。

道教の永生・再生・転生

筑波大学名誉教授
松本 浩一／中国宗教

道教は、その核をなす内容からいえば、仙人になるための方法と、雨を降らせたり病気を治したりするための呪術儀礼の、二つからなっていると見える。現在道教教団は、中国北部に勢力を張る全真教と、南部に顕著な正一教に大きく分かれる。前者は出家主義を取り、道観で修行に励み仙人になることを目指すことを主とし、後者は在家主義で、家に壇を構え人々に呪術儀礼を施すことで生計を立てる。経典としては、瞑想法などを説く『大洞真経』や、金丹の行法を説く『周易参同契』や『悟真篇』、儀礼で用いられる『靈宝度人経』や『北斗経』、呪術儀礼の内容を説いた『上清靈宝大法』や『道法会元』などがある。

道教が修行を通して到達することを目指す仙人とは、永生すなわち不老不死を達成した人を指すが、不老であるから本来は30歳ぐらいが理想で、谷の人である「俗人」に対し、山の人を意味するように、世間を超越していて高みから広く世を見渡せる能力を持っている。しかしそれだけに、成仙を成就するには大変な修行を必要とする。

カリフォルニアの人類学者たちが提出した、中国人一般の靈魂観のモデルに、「神←鬼→祖先」というものがある。人が死ねば鬼と呼ばれる。日本で言うオニとは異なり、単に死者を鬼と呼ぶ。鬼に子孫がいて祭祀を続けてくれれば、鬼は祖先となることができる。子孫が冥界での生活を支えてくれるわけで、鬼にとっては最も幸福な状態である。礼の規定では親が子孫を祭ることはできないから、子孫を残さないうちに亡くなった鬼に対しては、男であれば養子をとるか、女であれば冥婚をさせたりして、子孫を確保する手続きを取らねばならない。これを行わないと鬼は孤魂・厲鬼となり人々に祟りをもたらす。そして生前に人々のために尽くした人は、死後神に任命される。中国の神は冥界の官吏と言える。仙人は神とは違い、永生を達成しているから一旦死んでからなるという過程を経ていない。そして一切の煩惱・利欲から超越した存在である。

仙人になるための道教の修行法としては、臓器を守る神々を体内に留めておくために行う存思や、気の服用と体内の循環を目的とする服気・行気、あるいはこれと柔軟体操を組み合わせた導引などもあるが、一番重要なのは金丹の服用であり、『抱朴子』などに記述された錬丹術は、西洋錬金術との類似点も見られる。そして外部の爐鼎での操作ではなく、身体内で金丹を錬成する内丹が宋代以降は主流となり、現在ではこの実践は

気功と呼ばれて、受け継がれている。

仙人の種類には、白日に天に昇っていく天仙、名山に住む地仙、そして尸解仙などがある。尸解仙とは、いったん死んだと見せかけて棺に葬られるが、後に剣や竹の杖を残して消え去るというもので、これは一旦死んでから仙人として再生したともいえるが、教団にとっては、教祖は死んだように見えるが、実は仙人になったと主張できたため、都合がよかった。しかし尸解仙は、『真誥』など道教の文献の中では評価は低く、尸解仙はまず地下王者となり、冥界で修行を重ねないと仙人として認められず、仙官となることもできないとされていた。

黄籙齋は六朝時代、五世紀のころから存在していたと思われるが、死者を地獄から解放し天界に送るための儀礼で、現在台湾では功德という儀礼になっている。唐末五代の道士杜光庭が基本形式を完成し、神々への供養と読経、祈願文の提出などからなるが、宋代に破獄（地獄から亡魂たちを解放する儀礼）、召霊（魂）（亡魂たちを齋が行われる壇に招く）、疾病の治療（身体を完全な状態にする）、沐浴（身体を清めこの世への執着を除く）、施食（甘露食によって食などの欲を克服する）、鍊度（罪過・穢れを除き新しい身体・精神にする）、伝符・授戒（天界へ生まれ変わる資格を与える）からなる、新しい一連の儀礼が加わり、以後こちらの方が中心となる。十三世紀初めごろ成立したとされる『無上黄籙大齋立成儀』や、十三世紀後半の成立と考えられる金允中『上清靈宝大法』等の記述によれば、人が転生を繰り返すことは前提となっており、黄籙齋は亡魂を天界・仙界に転生させることを目的としていたといえる。

以上の内容で講義を行ったが、驚くほど活発に質問が出されたほか、提出されたレポートにも多くの質問が記されていた。その中には「仙人は不老不死となるが、そのようになったことをどのように認識するか」、「不老不死は生命という枠組みを超えているのではないか、死後の世界に時間は存在するのか」といったような、改めて考察を要するような質問もあり、道教ばかりでなく中国の民俗としての冥婚に関する質問なども多く見受けられた。

道教に関しては初めてその内容に触れたという感想も多く、また中国の民俗についてもあまり知る機会がないように感じられた。これらの問題を日本の宗教や民俗の状況ともあわせて考えることは、日本と中国の歴史的な関係と相違点をより深く知るためにも、大変に重要なことであると思われる。

体運動習性とはなにか？

慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科

新妻 雅弘 / AI、体運動習性、バッハ研究

「体運動習性仮説」の研究は新しい人間研究の道筋を示す新たな可能性を秘めている。現代私達の生きる社会が発展の基盤としてきた所謂科学は、その行き過ぎた姿を抑制する術を失った現状により、その限界を私達に突きつけた。ゲーテなどはこのことを早くから予見し、ニュートン科学の自然への態度のもたらす危険性に警鐘を鳴らしていた。ハイゼンベルクなどはゲーテの提唱する「即対象的思惟」などに基づく自然科学を新しい科学として受け入れ、以下のように述べている。「自然科学は抽象への道を歩いて、ものすごく広い現代技術の領分を獲得しました。それと同時に、ゲーテが予見したような危険も、こんなにも威嚇的になりました。魂の脱落や、労働から人間が脱落していること、現代兵器が背理であることを考えればよくわかることです。」

このような態度が偏った結果を招く、その最たるものは身体を対象とした研究である。キネシオロジーやバイオメカニクスなどの精密科学的な運動研究が主流になった今日、本来分解できない運動がサイバネティクスによってブロックダイアグラムとして分割され、因果決定論に基づいた極小化によって矮小化されてしまい、この枠組みにあてはまらないものは非科学的として退けられてしまうのである。このことは医学にもあてはまることである。しかしながら、そのことが生み出す「弊害」が無視できないほどに、現代社会の問題は肥大化している。そして、「生死」の問題は、まさに、このような「やり方」では扱えない問題なのである。

本講義は、「要求」という概念を観察可能な現象の背景にみることで、そのような従来の身体へのアプローチの限界を克服して人間の「生命」としての側面そのものを捉えんとしていたものである。ミドリムシの死を考えることからはじめ、凝集する力に着目した「要求」や「体運動習性」という言葉の定義から、センサを使った測定、そして身体志向デザインラボの活動紹介までを行った。「生死とはなにか？」という質問に対して、多数の興味深い対話がなされた他、最後の質疑応答でも教員側が多くの考えさせられる質問をもらい、半学半教の精神の場であることを再認識した。

美術は「死と再生」をどう表現してきたか

武蔵大学名誉教授

香川 檀／表象文化論・20世紀美術研究

本講義では、西洋絵画に描かれた死の観念について紹介したうえで、その主題や定型のモチーフを受け継ぎながら今日の「死と再生」を表現した現代アートについて考察した。周知のように、西洋では長らくキリスト教の死生観が支配的であり、現世で信仰篤く生きれば死後において肉体は滅んでも靈魂は永遠に生き続けるとされた。しかしこのような死生観は、時代とともに世俗化によって信仰の基盤が失われるにつれ、次第に骸骨化していく。そのとき、美術作品のなかで、現世の生のはかなさや死の偶然性・他律性（自身でコントロールできないこと）はどのように描かれていくか、また死と再生の循環をどのように造形するかを考察した。

17世紀オランダの「ヴァニタス画」

人間の生には限りがあり、死はいつどのように訪れるか知れず、自らの意思では如何ともしがたい運命の手に委ねられている。このような「生の儚さ」と死の観念を絵画の主題としたのが、17世紀オランダの「ヴァニタス画」である。静物画の特殊なジャンルで、テーブルの上に置かれた豪華な花や食器、宝飾品や楽器などとともに、ひとの頭蓋骨をはじめ、火の消えかかった蝋燭やパイプ、シャボン玉、そして時の経過を可視化する砂時計や懐中時計などの定型的「ヴァニタス・モチーフ」が用いられた。いずれも、現世の贅沢や快楽を戒めて禁欲を促すための寓意表現とされる。（ただし、実際に絵を購入した受容者がそうした図像学的な意味を忠実に受け取っていたかどうかは諸説分かれるところである。）

そのほかにも中世に図像として定着した、運命の女神が操る「生の車輪」、死を骸骨の姿で擬人化した死神が踊りながら生者を連れ去る「死の舞踏」、そして女性の若さと美を死神が脅かす「死と乙女」の図像も、広義の「ヴァニタス」の主題系として美術史の伝統に加えられていった。18世紀以降、社会の世俗化が進むなかでも、これらの図像伝統は生き続け、たとえば19世紀末の象徴主義の画家アルノルト・ベックリーンは死神のいる自画像を描き、20世紀初頭にはウィーンの画家グスタフ・クリムトが髑髏の姿の死神をもちいて死とエロスの対立を表現した。さらに二度にわたる世界大戦を経験した画家たちは、それぞれの画風でヴァニタスの主題を変奏していき、有名なパブロ・

ピカソも第二次世界大戦の終結後まもなく、テーブルの上の髑髏を描いた静物画を制作している。

現代美術のなかの「死」と「再生」

死や災厄を象徴する明快な記号としての髑髏のモチーフは、現代アートのなかでもさまざまな美術家に取り上げ、自身に迫る死の予感を表現したり、社会批判のメッセージをこめたり、あるいは純然たる絵画表現の実験として使用したりした。加えて、現代では絵画や彫刻だけでなく、日用品を素材としたり、写真や動画といったニュー・メディアを用いる制作が主流となっており、そうした表現媒体に固有の時間性というものが「生と死」や「再生」を比喩的に表現するようになる。つまり、西洋美術の伝統的な図像学とはまったく別の新しい意味が加わるのである。本講義では、特徴的な3作家の作品を取り上げてみた。

スイス出身のジャン・ティンゲリ (Jean Tinguely) は、廃材の機械部品を組み立てて、電動で動く彫刻を作った。晩年の1980年代にはとくに死と喪失をテーマに制作し、オートレースの事故車を素材にした作品でハンドルを「生の車輪」に見立てたり、火災に遭った酪農家の被災物からなる彫刻に、ホロコースト (ユダヤ人大量虐殺) を想起させるナチスの医師の名前「メンゲレ」と「死の舞踏」のタイトルをつけたりした。組織的かつ機械的に遂行された大量虐殺が暗示されている。フランスのクリスチャン・ボルタンスキー (Christian Boltanski) は、個人の存在を示す顔写真・名前・古着などを集めて展示する作品を多く手がけた。新聞の訃報欄に掲載された市井の人々の顔写真ばかりを集めた作品では、故人の生前に撮影された微笑むポートレート写真が、誰にでも必ず訪れる死の遍在をつよく感じさせる。そこには、写真というメディアがおびている、撮影の瞬間の被写体は二度と同じものとしてそこにはない、という「不在と死」の潜在的意味も与っている。日本人女性としてドイツを拠点に絵画と彫刻を制作するイケムラレイコは、水平線や大地に横たわる少女像や母子像をつうじて生命の原初のすがたを描き出した。そして、テラコッタ (粘土) 彫刻によって「土から生まれ土に還る」人間像を表現するなかで、空洞の胴体をもった女性像に辿りつく。それは、奇しくも縄文時代の容器型土偶が死者の骨を入れて再生を願う呪術的な意味をもったものであったことと符合する。東日本大震災のあとに彼女が追悼の意をこめて制作した、人が中に入れるほどの大きな観音像は、まさにこうした胎内回帰の死生観に裏打ちされたものだったのである。

授業後は、時間内に回答しきれないほど多くの質問や感想が寄せられた。西洋のヴァニタス画は、なぜ人の死を人間ではなくモノという静物で表現したのか。このような寓意的な表現によって現実の死から距離をおき、死から遠ざかるように見えるが、画家たちの意図はどこにあったのか。ボルタンスキーの作品の顔写真は、複製を重ねてボヤけていき死相を濃くしていくが、これは個の死から普遍的な死への抽象化を意味しているのだろうか、などの声が寄せられた。またレポートでは、女性の視点から見た西洋絵画の女性表象に対する批判的コメントなどもあった。そのような美術作品の「イメージを

読む」試みをつうじて、生と死に関する思想と、その表象のもつ意味作用の射程を理解することは、若い人たちにとって非常に大切な経験であると考えている。

— 2024年5月31日

『神曲』の生と死

東京大学大学院総合文化研究科
村松 真理子／イタリア文学

興味深い連続講義に参加でき、大変うれしく感じました。意欲的なさまざまな学部の学生たちを長年ひきつけている企画であり、リベラルアーツ的なテーマを軸にした多分野にわたる授業の組み立て・準備や開講のための手配を担当されている先生方に心より感謝するとともに、一教員として、しばしば本務校で連続講義を企画したり運営したりもする立場から興味深く参加させていただきました。今後もこの連続講義が貴大学で継続されることを期待しております。

以下、講義の概要、質疑の様子、講義後の雑感など。

講義の概要：ダンテの『神曲』について、今この戦乱と混沌のヨーロッパ中世において生まれた作品を読む今日的な意味についてまず確認した。コロナ禍やウクライナ、パレスティナにおける紛争・戦争という世界の状況の中で、二項対立的ではない「文学」という形で語られるテキストこそが求められているのではないかという論点から出発し、ダンテの作品が書かれた時代性やテキストにおいて語られている「死」と「生」についてを軸に、読み継がれている「古典」としての価値について考えた。地獄篇第1歌を通して、まずヨーロッパの中世人にとって、肉体としての死以上に、精神一魂の死・滅びがいかにおそるべきものとして捉えられていたのかを想像し、救済—生命がどのようなものとして認識され、どのような切実さをもって求められていたのか、という『神曲』全体のテーマをめぐって、作品の構造や内容・物語について説明した。そして、その「古典」というものが、いかにそれ以前のテキストの引用から成り立ち、さらに後世に読み継がれていったのかを、古代の英雄オディッセウスが罪人として登場する地獄編第26歌を例にたどった。まずホメロスやウエルギリウスの難破のイメージやトポスをダンテがどう継承しているのか、テキストの引用を比較してたしかめ、近代にいたってからのレオパルディの詩や、20世紀のプリモ・レーヴィの作品においても、テーマがあらためて蘇ってあらたな時代の歴史的文脈で語りなおされたことと、その意味についてふれた。特に動物ではなく人間であるという存在の意義やその根拠、さらに生命の尊厳自体への問いかけと、獣性や戦乱に対峙するべき個人の知性の探究と個を超える人類の救済というテーマに関し、ダンテのことばをどう解釈できるか、それが今日まです

のように読まれてきたのかを具体的な翻訳テキストをたどりながら考えた。そして、それが中世ヨーロッパ特有の問題と思われると同時に、知性・科学の探究を人間の尊厳と生命の尊重との関わりの中でどう捉えるべきかという、私たちの生きる現代の世界と状況にもつながっていることを考察した。

質疑の様子：講義の中でふれられたが時間的に深めることのできなかったダンテのテキストと20世紀文学のプリモ・レーヴィの作品との関連や、現代社会の状況の中に生きる実感や感性とともに古典作品・文学を読み解釈することの重要性について、参加者からのコメントや質問によってあらためて議論することができました。また、ギリシャ・ラテンの古典の言語や詩の伝統が、中世のダンテのイタリア語の詩や韻律にどのように引用され、記憶されつづけたのかについてや、ダンテ作品の構造自体が示している象徴性についてなど、授業の内容と受講者の関心とがむすびついた具体的な質問もあり、ほかの出席者の視点や知識を広げる質疑応答となりました。

その他：熱心な受講者がさまざまな学部から集まって、多くの分野の専門家から「生命」のテーマを軸にして、ともに授業を聞く形は、非常に有意義だと思いました。

生きるための死と再生

慶應義塾大学文学部

田口 瑞姫／生物学・発生生物学、比較免疫学

ホモ・サピエンスは永遠の生命を手に入れることができるのだろうか？再生医療やクローン技術など、科学技術の進歩が著しい現代社会において、個体の再生（蘇生）や不老不死といった「永遠に生きること」への関心が高まってきたように思う。我々がホモ・サピエンスという種として生きる中で、いつかは必ず迎えなくてはならない「死」は、そもそもなぜ存在するのか。講義の前半では、生物がたどってきた歴史を振り返りながら、生物学的な視点から「死」の存在意義について考察した。後半では、生物が個体としての生命を維持するために体内で引き起こされる細胞レベルでの「死と再生」について、イトマキヒトデの免疫学的自己の確立に関する研究を紹介した。

「死」という概念がいつ生まれたのかを考えるためには、生命の進化の過程を遡る必要があるだろう。地球上に生命が誕生したのは約38億年前、初期の生命は、海中で自然に集まった有機物が細胞のようなタンパク質膜で包まれた構造物（コアセルベート）を形成することから始まったとされる。これが原始的な単細胞生物へと進化し、分裂によってその数を増やして生息域を拡大していった。生命の設計図であるDNAの塩基配列は、分裂のたびに複製され、分裂細胞へと受け継がれていくため、当初の生命には寿命や死という概念は存在しなかった。事故死がない限り、個体の生命は永遠に続くものであった。

やがて、DNAを1組しか持っていなかった単細胞生物の中で、合体と分離を繰り返すものが現れた。この過程で有性生殖が始まったとされる。これにより遺伝子の多様化が進み、環境に適応できる個体が集団内に維持されるようになった。その後、DNAを2組持つ生物が増え、さらに多細胞生物が出現すると、これらの生物は多くのDNA分子を持つために、DNAの損傷や生存に不利な突然変異が個体に多く蓄積されるようになる。これらは有性生殖を通じて子孫に引き継がれ、集団内に拡散する恐れがある。これにより種の絶滅リスクが高まってしまう。このため、進化の過程で、一定の時間経過後に細胞が死ぬようにプログラムされる仕組みが発達したと考えられる。これにより、個体は「死」を迎えるが、種としての存続は可能となるのである。

現在、不老不死や永遠の生命を求める声が上がっているが、これは進化の過程で選択

されなかったものと捉えることができる。我々が獲得したのは、個体の「死」を受け入れ、有性生殖により多様性に富んだ個体を再生することで、種の存続を図るという戦略なのである。

遺伝情報の多様化は、単に個体の多様性を生むだけでなく、個性性を確立することにもつながっている。「わたし」と「あなた」の境界はどこにあるのか、「自己」と「非自己」の認識について考えたことがあるだろうか。我々の研究室では、「自己とは何か？」という問いを掲げ、イトマキヒトデを対象に自己・非自己認識機構について研究を進めている。

イトマキヒトデは、浮遊生活をおくるプランクトン型の幼生から、変態を経て、底生生活をおくる成体へとその形を変化させる。非常に興味深いのは、幼生期と成体期で自己非自己認識様式が種特異性認識から個体特異性認識に変化することである。つまり、変態を経ることで「種=自己」が「個体=自己」へとアップグレードされるのだ。

幼生期の自己非自己認識が「種=自己」であることを利用して、遺伝的に異なる細胞集団からキメラ個体を作製すると、変態後、稚ヒトデ期に入って約2週間～1ヶ月ほどの間に全個体が死滅することが明らかになった。これは、ヒトデの免疫学的自己が稚ヒトデ期に確立されることを示している。

このとき、ヒトデの生体内では何が起きているのだろうか。変態期には、幼生から成体へとボディプランが大きく変化する。岩場などに固着した幼生は、徐々に幼生組織を退縮させ、新たな成体組織を発達させてゆく。本講義のテーマである「死と再生」という視点からこの現象を観察すると、幼生である自身を構成している細胞の「死」があり、新たな成体を再構成する過程は個体の「再生」とも見なすことができる。

イトマキヒトデの変態現象を通じて細胞の死と再生を紹介したが、細胞死は個体発生に限らず、様々な生命現象において必須である。細胞は日々、「死と再生」を繰り返しながら、我々の生命を支えてくれている。

講義の最後には、たくさんの質問をいただいた。特にクローン技術に関わる質問が多かったが、哲学的な視点を含む複眼的な質問も多く、私自身にとって非常に刺激的な時間となった。難しいテーマであるが、生物学的な視点から考える一助になれば幸いである。

死と再生のコスモロジー ——出羽三山の修験道

慶應義塾大学名誉教授
鈴木 正崇／文化人類学

出羽三山は東北を代表する霊山である。庄内平野から望むと長く連なる尾根の彼方に穏やかな山容の月山が連なり、北方の端には羽黒山、そして南方には湯殿山があって三山をなす。出羽三山は、大峯山・英彦山と共に修験道の三大根拠地であった。今回の講義では、修験道の修行の根本主題である「死と再生」について論じた。

修験道とは、山岳で修行し、「験」と呼ばれる特別な力の獲得を目指す。山岳信仰を基盤に、仏教、特に密教の教義を取り込んだ。修験は山伏とも呼ばれ、僧侶や神職とは異なる第三の職能者で、普段は里にあって灵力や法力への信頼に基づいて加持祈禱を行った。病気直し、雨乞い、人生儀礼、小祠小堂の祭、薬草の処方、文字教育にも関与し、「野のカウンセラー」として広く活躍していた。江戸時代中期に盛んになった民衆の山岳登拝では先達を務めた。しかし、明治元年（1868）に新政府が展開した神仏分離の政策によって、神仏混淆の修験道や山岳信仰は壊滅状態に陥り、日本人の精神史を大きく覆した。近代を通じて徐々に復活を遂げたが、往時の隆盛を取り戻すには至っていない。出羽三山は、神仏分離以後、「仏の山」から「神の山」に転換し、神社側は三山を過去・現在・未来を巡る「よみがえりの山」と意味付けるようになった。

羽黒修験は、出羽三山を経巡る夏峰の登拝について、「三関三渡」を説く。羽黒山は現世の仏の観音菩薩の浄土で娑婆の幸せを祈り、修行を通して生死の海を渡る。月山では極楽浄土に赴き、阿弥陀如来の妙法を聞く。湯殿山では仏菩薩の加護を得て寂光浄土で法身の大日如来にまみえる。また、別の口伝では、羽黒山の観音は現世の衆生を救済する仏で「現在」、月山の阿弥陀は死後の世界の仏で「過去」、湯殿山の大日は「未来」を表わすと伝える。夏峰は現在から過去へと時間を逆行し、更に過去から現在を飛び越して未来へ赴く三世超越の行であった。山中で体験する時間は現在→過去、過去→未来と流れる。過去→現在→未来の流れを断ち切って、時間の遡行と超越を体験させ、現世の秩序とは異なる時間の流れを体験する。大自然の中での独自の空間と時間の体験を通して、人間の身体が再構築されるのである。

本格的な山伏を目指す秋峯修行では、山中では「六道」を経巡り、「四聖」^{しせい}を経て仏や大自然と一体化する十界修行を行う。修行を三つの宿にわけ、一の宿を地獄・餓鬼・畜生、二の宿を修羅・人間・天界とし、合わせて「六道」、三の宿を声聞・縁覚・菩薩・

仏の「四聖」として、各々に相当する修行を行ない、輪廻転生を越えて仏と合体する即身成仏を目指す。新たな身体に生まれ変わり、新たな生を受ける。出立前夜の「笈からがき」では、靈魂を笈に祝い籠めるとも説く。肉体と靈魂を分離し、自分達の葬式を行うのである。翌日は亡者となりナンマイダンボと念仏を唱え供養しつつ山に登る。出立にあたり、黄金堂では梵天倒しと称する象徴的な男女和合を演じて新たな生命を宿す。山中では修行者は胎児に見立てられ、「胎内五位」を経て徐々に安定する。山伏が背負う笈は母胎であり、被り物の斑蓋は胞衣を表わし、胎児が母親に抱かれた姿なのである。山中では死と再生を繰り返す修行を行い、最後は産声を上げ、出生と称して参道を産道に見立てて駆け下る。山麓では産湯と見なされる場柴燈の火を飛び越えて赤子として誕生する。山中では、生から死へ、死から生へという流れを同時に体験し、日常世界の時の流れを象徴的に逆転する。「母胎回帰」と「擬死再生」を主題とする死と再生のイニシエーションによって正式の山伏として認められる。

修験は山に籠り山を歩くことで、死後の世界と誕生以前の世界を同時に体験する。生者は誕生すれば最後は確実に死ぬという通常の時間の流れを抜け出して、生まれる前の母胎の中に入り、死んだ後の靈魂の行方を体験する。日常の時空間を逆転するのである。生と死が交錯する修行の根源には、山をいのちを育む母なる山と見なすと共に、山を死者の魂が赴く他界とする世界観がある。山は里の人びとに衣食住の多くの恵みをもたらす。山からの湧水や川の水が人々の生活を支えてきた。山の信仰の根源には水がある。沢山の雪が降り積もることは豊作の徴であった。山は水をもたらすいのちの源泉なのである。山の修行の目的は、大自然との一体化を通して、自然も人間も共にいのちを持つことを共感的に体験することにあった。

本講義にあたっては、話の内容が「宗教」について語ることだという先入観を排除するために、「宗教」という言葉を封印するという宣言を最初に行った。「宗教」は religion の翻訳概念であり、キリスト教、特にプロテスタントがモデルになって、明治初期以降に定着した。教義・教団・儀礼を一体化した「宗教」は日本の実態、特に民間習俗にはそぐわない。日本人にとって神や仏は「空気」のようなものであり、かつては日常生活に組み込まれていた。一神教をモデルとする「宗教」には、怖い・騙されるといった負のイメージがまといつている。日本人の家庭には、神棚と仏壇があり、朝な夕なに拝むことが日常であった。生後男子は 31 日目か 32 日目、女子は 32 日目か 33 日目には、地域の神社にお宮参りをして「氏子入り」を果たし地域の祭りに奉仕した。盆や彼岸には「ご先祖様」を祀る習俗が長く続いてきた。神の信仰を支える根源には「地縁」があり、仏の信仰を支える根源には「血縁」という社会原理があった。キリスト教や「新宗教」は、神棚と仏壇を否定し、教祖を崇め、教団の組織に加入し、全く新たな儀礼への参加を求める。「宗教」は「地縁」と「血縁」という社会原理の廃棄を迫る。従って、「宗教」は怖い。我々は「無宗教」であるという言説が生まれるのである。自らを「無宗教」と強く主張する日本人は、外国人から見ると異様にさえ見える。例えばアメリカでは、多くの人々にとって「宗教」を信じることは普通のことであり、「無宗教」と主

張することは人格を疑われることにもつながる。アイデンティティがないとみなされることにもなる。日本人は長い間、神と仏を「空気」のようにして生きてきたことを自覚すべきであろう。学生の多くは「空気」の説に多くの共感を持ったようである。

「蘇生」論争と自然発生説

慶應義塾大学医学部
鈴木 忠／生物学

生物は自然発生するか否かに関する論争は過去に何度も繰り返されてきた。この問題は、「子は親から生まれるのかどうか」、言い換えれば「自己と同一のものから生まれるのかどうか」という問題である。「すべては卵から」や「すべての生物は細胞から」というような自然発生を否定する標語が生まれた後になってもなお、19世紀のパリ・アカデミーを舞台として世間を騒がせたパスツールとプーシェの論争（1858-1864）は特に有名である。その論争と同時期にプーシェとドワイエールの間で繰り広げられたもう一つの論争（1858-1860）があったことはほとんど知られていないが、そこではクマムシなどの小動物が示す乾燥耐性が問題とされて、自然発生説論争と密接に関連していた。

本講義では、まず自然発生説についてアリストテレスの時代から18世紀まで概説した。レーウェンフックによる顕微鏡観察は新たな論争の舞台を用意し、また乾いた雨桶から発見されたワムシのように乾燥耐性を持つ微小動物の存在が知られることとなる。生物の自然発生を実験によって否定したスパンツァーニは、生物の乾燥耐性についても研究し、彼によれば、ワムシやクマムシは乾燥して「死」を迎えた後も、加水すれば「復活」する。死と復活、これも論争の種となっていく。ドワイエール（1842）はスパンツァーニの観察を再確認し、さらにこれらの微小動物は乾燥状態では120℃の高熱にも耐えうることを示した。

講義後半では、パリ・アカデミーにおける自然発生説論争の勃発から最初の1ヶ月間に絞って論争の経緯を克明に観察し、科学研究を取り巻く人間模様と熱気を紹介した。毎週月曜日に開催されるアカデミー例会ではジャーナリストのための傍聴席も用意されており、興味深い内容は記者により速報される。また議事録を印刷した週報が翌週月曜日に公表され、それをもとにした詳細な報道が続くことになる。1858年12月6日、プーシェから届いた論文の公表を延期する通知がされた直後からすでに、「自然発生説だろうか？」という期待とともに報道現場が騒がしくなり始めた。2週間後の12月20日にプーシェ論文が公表され、さらに1859年1月3日、年明け最初のアカデミー例会において、プーシェの結論が5名のアカデミー会員から強く否定されると、報道の現場においてもまるで場外乱闘の様相となっていくのだった。アカデミー側に共感するモワニョ

神父が編集する *Cosmos* 誌と、反体制的なビクトル・ムニエによる *Les Ami des Sciences* 誌の対立はその典型例である。その他の多くの報道は中立的で、中でも *L'Union Medical* 誌の社説でルグランは次のような言葉を残した。

明日の科学は前日の不合理の数々から出来上がるのが常であり、今日まだ知られていないことを不可能だと断言するのは不謹慎極まりない。そのことをアカデミーは忘れた。

アカデミーによる反応の中には、ドワイエールの研究に言及して、高温に対する生物の抵抗性を考えれば沸騰水で前処理を行ったプーシェの実験は不十分だと指摘するものがあった。シェルブールに滞在していたドワイエールは1月11日にパリに宛てて手紙を書き、自分の名前が挙げられたことについては感謝しつつも、報道で知ったアカデミーによるプーシェに対する応答の仕方には賛成し難い旨を伝えた。彼が読んだ具体的な誌名はわからないが、上述のルグランの言葉と同様な気持ちだったことが窺える。その証拠に、ドワイエールの1月22日付プーシェ宛の公開書簡の中で、アカデミーへの異議表明とともに、自分自身も7年前に勤めていた研究所で自然発生に関する実験を始めていたこと、しかし研究所が勅令によって突如閉鎖されて実験を続けることが不可能となったこと、プーシェには厳格な実験を続けて欲しいことなどが書かれている。その後、プーシェは自分の実験結果を擁護する中で微小動物の蘇生を否定することになり、プーシェを応援したはずのドワイエールとの熾烈な論争が始まるのだった。

受講生の多くにとって、ルグランの言葉が相当強く響いたらしく、それについての反応が目立った。当時の新聞や雑誌による科学報道がいかに素早く詳細だったか、という事実に対する驚きの声もあった。また、研究者も人間であり、科学研究が宗教や社会の動きに揉まれながら進んでいく行為だということも理解されたようである。1860年に出版された「蘇生」論争の報告書の表紙を飾るエピグラフとして、ハムレットの台詞“To be, or not to be, that is the question.”が使われている。乾き切って代謝の無い状態をすなわち「死」と捉えるのが普通であるが、乾燥したクマムシは水をかければ「復活」する。では死とは何か。

生命の自然発生が否定されるとしたら、そもそも地球の生命の起源は何だったのか。仮に宇宙から生命が飛んできたのだとしたら、その先は・・・？ 「わからない」ことはたくさんある、ということについても、かなり気づいてもらえたかな、と感じることのできる授業となった。

— 2024年6月28日

生まれることを問う

東洋学園大学グローバル・コミュニケーション学部
樋口 大夢／教育哲学、教育思想史、教育学

本講義では、子どもが生まれる、ということに関する様々な議論を手がかりとしつつ、2024年度の「生命の教養学」がテーマとする「死と再生」という問題圏に迫ることに取り組んだ。とりわけ、本講義では、反出生主義（Anti-Natalism）と出生主義（Natalism）と呼ばれる議論のいくつかに注目し、両者の主張の重なる点の探究を中心的な課題とした。「親ガチャ」というネットスラングの影響もあるのか、本講義に対する受講学生の関心度は高かったように思われる。

講義では、最初に先行研究を手がかりとしつつ、反出生主義と呼ばれる考え方のバリエーションがいくつあることを確認した。その後、『現代思想』でも特集が組まれるなど、近年注目を浴びているデイヴィッド・ベネターの「反出生主義」を検討した。ベネターは、英米を中心とする分析哲学的な観点から、あらゆる人間が生まれてこない方が良かった、という「反出生主義」の主張を展開する。この主張の根底には、「快と苦の基本的非対称性」と呼ばれる議論があり、本講義ではこのロジックについても検討を行った。

次に、このベネターの議論の受容と応答には、いくつかのバリエーションがあることを確認した。本講義では、その中でも出生や生殖に重きを置く出生主義とのかかわりに焦点を当て、とりわけ、人間が生まれているという事実の観点から検討を進めた。本講義の後半では、この事実に着目することを通じて、近年の先行研究では対立図式に置かれていた反出生主義と出生主義の重なる点の追究をした。その際に手がかりとしたのが、第二次大戦後のアメリカで活躍した政治理論家ハンナ・アレントの議論である。

アレントは、一般的に「出生主義」の論者として認識されている。しかし、アレントの「出生主義」は、生まれてこない方が良かったとする反出生主義的な考え方の上に成り立つものとして理解する必要がある。本講義では、講師の研究成果をベースとしながらこのことの確認を行い、アレントの議論がベネターを筆頭とした反出生主義の議論と必ずしも対立軸に置かれる必要はないことを検証した。

最後に、このアレントの「行為（action）」概念における「非主権的」な側面に着目し、出生主義と反出生主義をつなぐ回路の検討を行い、この観点から「死と再生」について迫った。反出生主義の観点から、出生主義の観点から、そして、両方の議論を重ねた観

点から、自殺や再び生きることについて考えられることを言及して本講義全体のまとめとした。

質疑では、講師がこれまで見たこともないような数の手が上がった。上述したように「親ガチャ」という言葉の影響もあり、実存的な問い、ベネターのロジックに対する問い、アレントの議論に対する問いなど、様々な視点からの鋭い質問を沢山いただいた。予定の時刻を過ぎても手の上がる質疑と講義後に受講学生からいただいた個人的な質問からは、このテーマについての彼らの関心度の高さを窺い知った。それぞれの鋭い質問に対して応答するのは大変だったが（そもそも十分な応答ができたかどうかは不安が残るところだが）、とても充実した気分の日吉キャンパスを後にすることができた。

講義後、この講義録を作成するにあたって、受講学生らが取り組んだミニレポートを拝読した。ミニレポートは、講義内容を踏まえて考えたことや講義では扱いきれなかった質問が記載されており、講師の思考をととても刺激するものであった。90分の講義とミニレポートは、講師に様々な学びを提供してくれたように思われる。受講学生にこの場を借りて謝意を表したい。

最後に、本企画の立案、運営をしてくださった慶応義塾大学教養研究センターの関係者の皆様にも深く感謝する。とりわけ、見ず知らずの私に講師依頼のメールをくださった谷口尚子先生、講義後に議論させていただいたコーディネーターの石川学先生には重ねてお礼申し上げます。

語り直されるノアの方舟の物語 ——20世紀ドイツ語圏の文学を読む

関西学院大学文学部

宇和川 雄 / ドイツ文学・思想

旧約聖書「創世記」に記されたノアの方舟の物語はよく知られている。聖書の記述によれば、地上に悪が蔓延していることを憂えた神はすべての生き物を滅ぼすことを決意し、ノアに方舟の建設を命じた。そして大地を水が覆い、生き物は死に絶えるが、ノアの家族と生き物たちは方舟に乗って危機を乗り越え、ふたたび地上で繁栄をはじめたという。本講義では、人類と世界の巨大な「死と再生」をテーマとしたこのノアの方舟の物語が、20世紀のドイツ語圏文学のなかでどのように語り直されてきたのかを講じた。

例として取り上げたのは、シュテファン・ツヴァイク（1881-1942）の『第三の鳩の伝説』（1916）とギュンター・アンダース（1902-1992）の『哀悼される未来』（1946 / 1961）である。第一次世界大戦中に書かれた『第三の鳩の伝説』のなかでは、同時代の戦争が大洪水の再来になぞらえられ、その早期終結に向けた切なる願いが綴られている。一方で第二次世界大戦後、核戦争（第三次世界大戦）の危機の高まりを背景として書かれた『哀悼される未来』のなかでは、近い未来に起こるかもしれない放射能汚染が大洪水の再来になぞらえられ、それを未然に防ぐための行動の必要性が説かれている。

ツヴァイクとアンダースはこのように、それぞれの危機の時代に、聖書のなかに記されたノアの方舟の物語を再生した。しかしここで疑問が生じる。ツヴァイクもアンダースも、それぞれの生きる危機の時代を、ノアの方舟の物語を比喻として使わなくとも、直接的に「第一次世界大戦」や「核戦争」という単語を用いて描くこともできたはずだ。しかし彼らは、そのようなやり方は選ばなかった。それはなぜか？ 彼らの用いた「寓話」という形式、比喻を用いた語りの形式には、事実を記録する語りの形式——ドキュメンタリー作品やノンフィクション作品のそれ——とは異なるどのような機能、効果があるのか？ 本講義では、最後にその問いに対するいくつかの答えを提示した。

質疑応答の時間には、出席者から示唆に富む多くの感想、質問が寄せられた。授業感想を読むと、多くの出席者が、現在ウクライナと中東の地で起こっている戦争に関心を持ち、戦争の時代に文学がいかなる力を持ちうるのかという点に思いをめぐらせていることが分かった。戦争の実態を読者に伝え、そこで起こる出来事を記録する文学もあれば、今回講義で取り上げた二作品のように、聖書の物語になぞらえて間接的に戦争を描

く文学もある。この二つの文学の機能の違いについては、今回いただいたコメントをもとに、今後改めて深く考察してみることにしたい。

慶應義塾大学教養研究センター

2024年度「生命の教養学」講義記録

2024年10月30日発行

編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター

代表者 片山杜秀

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL:045-566-1151

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

©2024 Keio Research Center for the Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。

Keio University

